

私学の魂

昭和女子大学附属
昭和中学校・高等学校

思いやりと貢献の心を育む体験教育の伝統に グローバル教育環境と学びの選択肢を加え さらに新たなサイエンス教育へと踏み出し 21世紀の日本と世界で活躍する女性を育てる!

2005年に文科省から「SELHi（スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール）」の指定を受け、翌2006年にはブリティッシュ・スクール・イン・トウキョウ昭和を開校、2007年にはザ・ボストン・ミッションプログラムを開始。その後、2016（平成28）から「SHOWA NEXT（本科コース・グローバル留学コース）」プログラムをスタート。それらを契機に、急速にグローバル教育へとシフトしてきた昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校。さらに2018年に導入して、これまで中3からスタートしていたスーパーサイエンスコースを、来春2021年4月からは中1入学時からスタートして、さらなる進化を図ります。こうした進化のなかで、生徒の成長をバネに、学内の活気と求心力を高めてきた同校に、今春2020年4月に着任した新校長の真下峯子先生をはじめ、中学校教頭の粕谷直彦先生、入試広報部長の杉村真一朗先生に今回はお話を伺いました。



校長の真下 峯子先生

DATA

1

昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校

- 沿革
- 1920（大正 9）年 日本女子高等学院創立。
 - 1927（昭和 2）年 財団法人日本女子高等学院を設立・高等女学部を昭和高等女学校と改める。
 - 1946（昭和 21）年 朋友班活動はじまる・生徒の自主的活動組織「光葉会」発足。
 - 1977（昭和 52）年 文部省から中高一貫教育研究開発校の指定を受ける。
 - 1983（昭和 58）年 五修生制度を導入。
 - 1988（昭和 63）年 アメリカ・マサチューセッツ州にボストン昭和女子大学を開学。
 - 2005（平成 17）年 文部科学省からスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールの指定を受ける。
 - 2007（平成 19）年 ザ・ボストン・ミッションプログラム開始。
 - 2012（平成 24）年 パリ・ユネスコ本部からユネスコスクール加盟承認。
 - 2014（平成 26）年 文部科学省から「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」の指定を受ける。選択制国内外研修旅行開始。
 - 2016（平成 28）年 「SHOWA NEXT（本科コース・グローバル留学コース）」スタート。
 - 2017（平成 29）年 昭和大学（医系総合大学）と特別協定校となる。
 - 2018（平成 30）年 「SHOWA NEXT（スーパーサイエンスコース）」スタート。
 - 2021（令和 3）年 中学1年次から「スーパーサイエンスコース」を導入。

校長 真下 峯子

所在地 〒154-8533 東京都世田谷区太子堂 1-7-57
TEL：03-3411-5115（お問い合わせ）
<https://jhs.swu.ac.jp/>

交通 東急田園都市線（半蔵門線直通）「三軒茶屋駅」下車徒歩7分。バス渋谷駅から「上町・等々力・田園調布・弦巻営業所・二子玉川・高津営業所・成城学園・祖師ヶ谷大蔵・狛江・調布」方面行きを利用し「昭和女子大」下車。目黒駅・祐天寺駅から三軒茶屋行きを利用し「三軒茶屋」下車。下北沢駅から駒沢陸橋行きを利用し「三軒茶屋」下車。

学内がより活気づききっかけとなった『SHOWA NEXT』カリキュラムと、生徒が自由に“選べる”選択肢の広がり

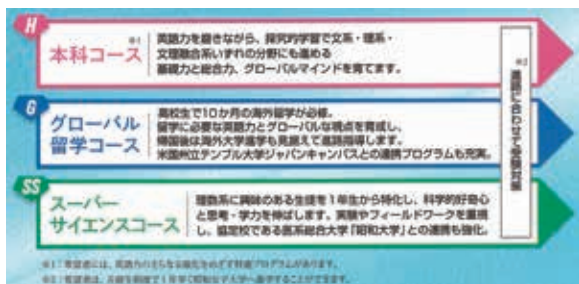
この数年、グローバル教育へのシフトに加え、新たな教育プログラムや教育環境を整え、年々進化している印象の昭和女子大附属昭和中高ですが、どういう経緯だったのでしょうか。

「2016年から開始した『SHOWA NEXT (本科コース・グローバル留学コース)』のカリキュラムをスタートさせたことが、大きなきっかけになったと思います」と、中学校教頭の粕谷直彦先生は言います。

「10年ほど前からグローバル教育に向けて舵を切っていたのですが、『SHOWA NEXT』には4～5年かけて準備をしスタートさせました。2014年に現在の坂東眞理子先生が学園理事長に就任したことも、『21世紀の日本と世界で活躍する女性を育てる』という本校の新たな教育目標に向けて、思い切って踏み出す弾みになったと思います。その第1期生が今年で高2になり、学内ではかなり大きな手応えを感じています。その第1期生のグローバル留学コースの生徒たちは、高1だった昨年に10カ月間、カナダへの留学を経験してきていますから、その経験からも様々な意味で啓発されています」と粕谷先生。

「その『SHOWA NEXT』のポイントは二つあります。ひとつは“選べる”ということ。それを形にしたもののひとつが、コース制であり、また高校の研修旅行にしても、行く場所を選ぶことができます。本校は以前から“選べる”機会は多くありました。たとえば『私の研究』という探究学習の時間があります。『総合的な学習』が始まる前から、自分でテーマ・指導教官を決め1年を通し研究することに取り組んできました。クラブ活動も30以上あり、希望に応じて選ぶことができます。選択で“選ぶ”ことのできる授業の多さも含めて、それらがいま教育の課題とされている個別最適化につながる面があると思っています。

二つ目のポイントが“現場主義”ということです。



2021年度入学生のコースは入学時から3コース。本科コース、グローバル留学コース(G)、スーパーサイエンスコース(SS)それぞれ6年間の特色あるカリキュラムで学習する。

海外研修に行くにしても、ただ観光地を回って帰ってくるだけではなく、現場の人の考え方・息遣いとか生活を感じてくることを大切にしています。ですから現場の学校との交流を欠かさないようにしています。

高校生が取り組んでいる『サービスマーケティング』という授業では、現在、世田谷区と協働し活動しています。まず事前にグループを組んで地域の社会課題について考え研究し、それから現地にボランティア活動に行き、そこにどんな課題があるかを再び考え、その解決策を提案をしていくという学習です。

ここでも“現場に行って話を聞き、感じてくる”ことを大切にしています。ラボ活動という小さな研究グループでの活動でも、一般的には珍しいタイの山の中に行き、現地のアカ族の人たちと一緒に生活をするなかで、女性の生き方や日本の社会について考える体験をします。

こうした『SHOWA NEXT』のカリキュラムをスタートして浸透するまでに1～2年はかかりました。率直なところ、グローバルクラスの募集を開始した最初はさほど多くの希望者はありませんでしたが、最近、内容が知られるようになって、徐々に受験生が集まるようになりました。大きく変わってきたのは、そうしたところです」と粕谷先生は説明してくれました。

この『SHOWA NEXT』のスタートによって、生徒一人ひとりが、授業や進路、体験活動も含めて、主体的に“選択できる”場面が広がったことと、“体験主義”ともいえる現場での貴重な体験が学習のモチベーションにつながったことが、生徒の成長とともに、学内が活気づく契機になったということなのでしょう。

生徒が希望する多様な進路に向けて進学できる力を育てるサポート体制と自主性を尊重する校風への変化

「もうひとつは、進路のあり方です。本校はそれまで、進学校としての色をあまり強く打ち出していませんでした。多くの方々には昭和女子大学の附属校として認知されていたように思います。そこを他大学も含めて進路を広げるよう力を入れたことで、現在では多様な進路が選べる体制が整ってきました。

とくに『SHOWA NEXT』のカリキュラムで色々な研究活動に取り組んできたことが推薦入試などで大学からも評価されるようになり、上智大学など色々な大学から高い評価をいただけるようになりました」と粕谷先生。

「学校のイメージが変わってきたこともあると思います。これまでの本校はどちらかというと、生徒たちの前に学校と保護者がレールを敷いて、そのレールをは



「世の光となろう」の建学の精神に基づき、生徒の目指すべき姿・日常生活の指針として示されている『校訓三則』。

ずれずにリズム良く走っていくのが昭和女子の優等生という時代があったと思います。ですから間違える前に助け舟も出し、違った方向に行かないように、対外的なコンテストなどにも、あまり積極的には挑戦を促していなかった面があったと思います。

しかし、前任の金子校長が、中高生の活動の範囲をひろげていくように働きかけをし、対外的な“他流試合”にも積極的にチャレンジしていくようになりました。

そうしたことで校内の空気が変わり、生徒がより生き生きとしてきました。それまでは研究発表一辺倒で、やや堅苦しかった文化祭も生徒の自主性を尊重することになり、来場者数も4千人から1万人に増えました。そうしたイメージの変化は、塾の先生方からも言われるようになりました。それも単に自由で楽になったというものではなく、自分たちが色々な道を探して活躍していけるようになったと感じられているようです」と粕谷先生は振り返ります。

「坂東理事長もよく言うのですが、女性が自立して生きていかなければならない社会に間違いなくなってきていますので、男性以上に活躍できる可能性を考えたときに、学校が子どもたちを管理していた部分を緩やかにして、『自分でルールは敷くもの』とし、脱線することもあるかもしれないけれど、もう一度自分でルールを敷き直して、自分でまたスタートすれば良いと考え、それで色々なことにチャレンジしていこうと働きかけてきました。

それが浸透してきたのが一昨年くらいからでしょうか。生徒たちがすごく生き生きとしてきました。学校のプログラムにも積極的に参加するようになり、何事にも生徒主導の雰囲気が強まってきました。そうした変化が、好感を持って受け止められているようです」と粕谷先生が、この数年の変化を語ってくれました。

「ここは環境にはとても恵まれています。世田谷という場所や、大学があり、そのキャンパスのなかにグロー

バルな環境があるということも、積極的に外に向けて発信するようになりました」と粕谷先生

昭和女子大学附属昭和が伝統として持っていた、女子の安全な教育環境としての予防教育的な側面を、この時期に自主性重視に転じたことが、それまでの雰囲気を変え、生徒が自主的に活動するようになり、新たな活気を生むことにつながったようです。

今後も自由に考え、行動して良いか、 新校長の真下先生に聞きにきた 頼もしい『SHOWA NEXT』第1期生

「私自身はこの4月から校長に着任して日が浅いですが、本校には本当に様々な選択肢があり、教育リソースに恵まれていると感じました。

あるとき『SHOWA NEXT』第1期生の高2の生徒が私のところに来て、『私たちの学年は、自分で主体的に選んで、やりたいことに思い切りチャレンジしようと言われて、新たな学校の雰囲気をつくってききましたが、校長先生が替わっても、その姿勢で良いのでしょうか?』という意味のことを質問してきました(笑)。そのときは嬉しくて、生徒たちの成長がなおさら楽しみになり、『どんどんやってみましょう』と答えました。生徒たちはそれくらい、自分たちがやってきたことに自負と誇りを感じていたようです」と新校長の真下(ましも)峯子先生は微笑みます。

「やはり彼女たち『SHOWA NEXT』第1期生の元気が、人気が上向いてきた要因なのではないかと感じています」と真下先生。

生徒たち自身が『私たちが新しい昭和女子大附属昭和の雰囲気をつくっていく』という自負が、最近の同校の雰囲気に大きく反映していることは確かなようです。

「校長に『自由にやらせてください』と言ってくる生徒たちに頼もしさを感じます」と真下先生。

真下先生はもともと、前任の女子校でも、生徒の自主性を尊重し、自由な活動を推奨してきました。

「女性でも、持っている能力を発揮して、失敗を恐れずに色々なことに挑戦してみようよと…。これからは人口も少なくなり、女性がもっと進出して力を発揮しなければならぬ場面が増えてきますし、そういうステージも用意されてきているので、そこで活躍できる力を身につけましようというのが、この思春期時代の女子を育てる上での教育の基本的な方針だと思えます。どこの学校でも共通なのではないでしょうか。

そうした力を育てるには、大学生になってからだと時間が足りないのですね。中高時代に自分で力をつけて、自立する意識を持たないと間に合わないの、高

校までに『自分の人生を自分で切り拓いていく』力が身に付くと良いと考えています」と真下先生。

「多くの方々に『昭和はカタい』と言われてきたようですが（笑）、生徒はものすごくダイナミックかつフレキシブルになってきているというのが私の正直な感想です」と真下先生は生徒の可能性を感じています。

「説明会手伝ってくれる生徒も、頼まれたからやるという姿勢ではなく、自分たちの学校だから誇りを持って、その良さを発信してくれるようになっていきます。そういう雰囲気、受験生と保護者も感じてくださっているのだと思います」と入試広報部長の杉村真一郎先生。

10年前からグローバル教育に舵を切っていたというのはどのような経緯によるもののでしょうか。

「本校には創立以来、『世界に目を向けましょう』という教育姿勢があったのです。ボストンの丘に土地を買って寮を建て、そこに学生や生徒を行かせるということも30年以上前から行ってきました。そして10年前に、グローバル教育にさらに力を入れようとなったのがその経緯だと考えています」と粕谷先生。

スーパーサイエンスコースを 来春2021年からは中1から導入。 さらにはメンターの仕組みも構想中

さらに来春2021年4月からは、これまで中3から導入してきた「スーパーサイエンスコース」を中1から選択できるようになります。ご自身も理系が専門の真下先生の考えも反映されているのでしょうか。

「着任したときには、この方向性は決まっていました。私の仕事は、その内容をどう作って軌道に乗せていくかということになります。最終のゴールはまだ明確化されていませんので、いま理科の先生方とその最終ゴールを相談している段階です」と真下先生。

「先ほどの『SHOWA NEXT』の導入時には、まず



スーパーサイエンスコース3年生による、Native teacherと理科実験 in English の授業。



入試広報部長の杉村真一郎先生（向かって左）と中学校教頭の粕谷直彦先生（右）。

グローバル教育から始めようという形でしたが、世の中の時流を考え、理系志望の生徒にも何らかの支援をしていく必要があると考え、このスーパーサイエンスコースを設けました。もともとの考え方として、個々の生徒が“選べる”よう、生徒本人の進路の希望にできるだけ沿いたいという考え方がありました」と粕谷先生。

「現在の6年生（高3）生でバイオサミットに参加した生徒がいて、その生徒の話を知ると、『昭和は理系のサポートが少ないですね』という感じ方をしていたようです。けれども最近は、サイエンスコースが特化した学びのできるコースであることが定着してきたことから、たとえば2年生から3年生になるときに、サイエンスコースを選ぶ生徒も出てきています。

これはまだプレスト段階ですが、中高でやらないといけないこととしては、生物系と物理系のサイエンスをサポートとしていくこと、絶対に必要な英語力を育てること、その両方に必要な数学の力を身に付けさせることの4つが必要だと考えています。そうしないと、スーパーサイエンスコースの出口（進路）が整わないと思います。工学系の進路ではデータサイエンティストをめざす学びや、生物系では医学など広い分野のサポートが必要になります。

そのために本校では今後、多様な進路についてのサポートや生徒の相談にも対応できて、生徒のロールモデルにもなるメンターが必要になると考えています。本校の卒業生も含めて、様々な人脈を通して、教員以外のメンターを探していくつもりです。なかなか大変なことなのですが…」と真下先生は、生徒の多彩な進路の後押しとサポートをする仕組みを考えています。

「すでに社会の専門分野で活躍を始めているメンターと、同じ学内にいる本校の先輩がメンターになる、メンターと出会える仕組みを考えたいと思います」とい

う大きな構想を真下先生は持っているといいます。

「スクラッチをスタートにプログラミングを学ぶ先に、サービスマーケティングで発見した地域貢献のための課題について、最終的にはその解決のためのアプリを生徒自身が作れるようになればと考えています。形にできると、さらに次のステップへのモチベーションが高まると思いますので…」と真下先生の構想は広がります。確かに、形ができると、生徒はもっと良いものを作りたいとか、もっと学びたいと思うようになるはずです。

独自のユニークな五修生制度と、 多様な進路へのサポート体制を整え 女子の大きな成長と挑戦心を育む！

そうして『SHOWA NEXT』のカリキュラムやコース制に象徴される新たな学びの仕組みを作り、学内の雰囲気活性化してきた一方で、昔から昭和女子大附属昭和で受け継がれてきた伝統の良い面も一方では大切にしている印象を受けます。

「いまま本校独自の『五修生制度』は続けられています。昭和女子大への進学を希望する生徒を対象に、5年(高2)生でひと通りのカリキュラムを修了し、6年(高3)生からは、週の大半は昭和女子大学の講義に参加して、週1コマだけ高校のホームルームに参加するという、これは面白い制度ですよ」と真下先生も新鮮に感じています。

「先日は高校の卒業アルバムの写真撮影に、五修生(と呼ばれる)生徒たちは、スーツを着てきていましたね」と真下先生。

「以前からですが、五修生は週に一度、私服や自由な髪型で高校の授業に参加している生徒もいます。あまり外には伝えていませんでしたが…」と粕谷先生。

五修生の制度があることは以前から編集部も知って



ブリティッシュスクール in Tokyo の生徒たちとの交流。

いましたが、そんな場面が校内で見られることは、私たちも初めて知りました。まさに多様性を生かした“選べる”教育を展開している同校の空気感が伝わります。

さらに同校では、昭和女子大学で3年学び、同じキャンパス内に誘致されているテンブル大学ジャパンキャンパスのほか海外の協定大学(中国の上海交通大学、韓国のソウル女子大)で2年学ぶことで、単位互換により5年間で双方の学位を取得できるダブルディグリー・プログラムもあり、それも大きな刺激になっています。

「上海交通大学などは、いわゆる超難関大学ですので、恵まれた制度ですよ」と真下先生。

「さらに2017年からは医系総合大学である昭和大学との特別協定を結んだことも、医学部への進学をはじめ、生徒の進路の幅を広げる結果につながっています」と粕谷先生は感じています。

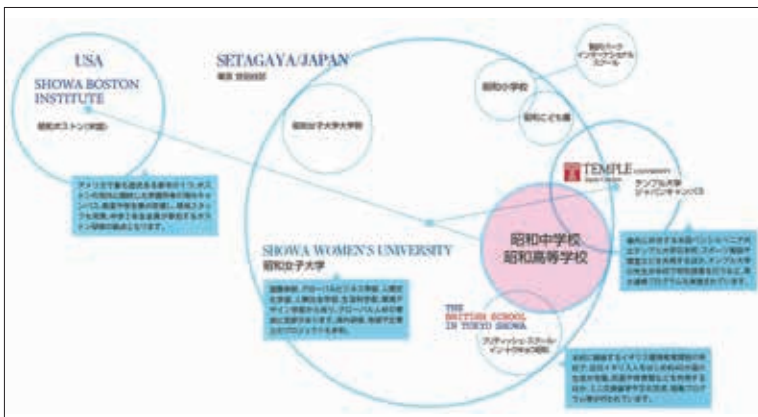
「医者は患者の心がわからないといけなないので、昭和で育ってきた生徒はすごく良い。もっと来てほしいと学長先生がおっしゃってくださいました。もっと推薦枠がいただけるようにしたいですね(笑)」と真下先生。

五修生制度をはじめとした昭和女子大学への推薦進学

の道に加えて、昭和女子大学への推薦を得たまま他大学を受験して、他大学の合否結果が出た段階で進学先を選択できる「推薦入学+他大学」という進路選択方法も広がってきたことで、同校の生徒の“選べる”進路はますます広がってきたようです。

海外キャンパスとして学園が所持する「昭和ボストン」での12日間の海外研修には、中学2年生全員が参加します。これも恵まれたプログラムです。

「それまでに海外旅行を体験している生徒は多いのですが、ボストン



キャンパス内には多様な学びの場(小学校、中高、大学、テンブル大学、BST)が広がり、その環境で得るものがボストン昭和での学びにもつながる。

は観光ではあまり行くことのない歴史と学問の街です。そこで受ける刺激も大きいですね」と粕谷先生。

「丘を挟んで川があって、すぐ近くにハーバード大学とMIT（マサチューセッツ工科大学）があるという、すごく良い環境ですよ」と真下先生も言います。

「アメリカの文化にどっぷりとつかる体験は初めての生徒が多いですね。行く前に事前研究に1年間かけて取り組んでいます。現地ではだいたい午前中は英語の研修、午後からは各自が選んだテーマによって、歴史を調べるコースや、文化を知るコース、アートに触れるコースなどが選べます」と粕谷先生。

「中2の終わりに出かけることにも意味があります。本校のカリキュラムは大枠で2年刻みになっているのですが、学習面でも、人間的な成長の意味でもベースを固める時期に、このボストン研修を体験することで、精神的に大人になって帰国する生徒も多いですね。現地の先生方が生徒の自由を尊重してくれるなかで、『自立』と『自律』の二つの意味での成長のきっかけになると考えています」と粕谷先生は言います。

新たな進化のもとでも受け継がれる 仲間を思いやり、助け合って貢献する “昭和の心”を育てる朋友班活動

そのほか、4年（高1）生で行くカナダへの10カ月の長期留学には、グローバル留学コースの生徒が参加します。現在のところ、3つのコースを選択する生徒数の比率はどの程度なのでしょう。

「現在は本科コース4クラス、グローバル留学コース1クラス、スーパーサイエンスコース1クラスという生徒数比です。ただし今後は生徒の希望によって変わってくるかもしれません」と粕谷先生。

「海外帰国生のマーケットはとても大きいので、そうしたニーズや期待に充分に応えることができる体制を



朋友班活動は学年を超えた縦割りの先輩たちとの校内活動、協働作業。



中学2年生が全員参加するボストンミッションでは、現地の子どもたちと積極的に交流を行う。

整えたいと思っています」と真下先生のこの先の構想では、帰国生にも焦点が当てられています。

ほかにも、戦後間もない1946（昭和21）年から行われてきた、伝統の「朋友班活動」を、現在でも行っているといいます。

「朋友班活動は、1～6年生の生徒で縦割りの班を作り、校内美化や親睦などを行う活動で、本校の特徴的なプログラムのひとつです。異学年のコミュニケーションや協働が、大学や社会で役に立ったという卒業生も多くいます」と粕谷先生。

異学年の生徒のグループが互いの役割を果たして、自分たちの身の回りの環境を整えたり、学校生活に必要な『協働』体験をしていくことが、同校の生徒たちの“心育てる”うえでの大きな役割を果たしているようにも思えます。

「生徒たちは、横の関係だけではなく縦の関係のつながりがあることで安心できる面があるようです。また、朋友班活動では誰もがリーダーになったり、フォロアーになったりするので、役割を果たす使命感が育ってきます」と粕谷先生も言います。

そこには仲間への思いやりや配慮、助け合い、貢献する気持ちも必要になるので、それがまさに“昭和の心”を育む貴重な経験になっているように感じられます。

さらに来春2021年4月からのスーパーサイエンスコースの中1入学時からのスタートも、さらに学内を活気づけることになりそうです。

「このコースの中3生は、学年末までには9割が数学検定の準2級（高1終了程度）を取得しています。そうした成果や手応えからも、このコースの中1からの導入は楽しみですね」と粕谷先生。

今後の昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校のさらなる進化と、生徒たちの元気でパワフルな成長と活躍がいつそう楽しみになってきました。